

ピ<sup>○</sup>ー  
タ  
ア  
・  
フ  
ツ  
ク

(2014  
年版)

作・小佐部明広

## 【登場人物】

小山……………北成別市の新進気鋭の劇団「演劇集団 ネバー・ランド」の  
脚本・演出。23歳。フリーター。

小佐部……………「演劇集団ネバー・ランド」の役者。23歳。フリーター。

玉井……………「演劇集団ネバー・ランド」の役者。22歳。民間企業に就  
職が内定。

有田……………「演劇集団ネバー・ランド」の役者。22歳。大学4年生。  
就職の予定なし。

辻……………「演劇集団ネバー・ランド」の役者。21歳。大学3年生。  
就職するか悩んでいる。

佐竹……………「演劇集団ネバー・ランド」の役者。19歳。大学1年生。

山下……………「演劇集団ネバー・ランド」の舞台監督。22歳。大学4年  
生。北成別市の劇場に内定。

柴田……………「演劇集団ネバー・ランド」の制作。22歳。大学4年生。  
公務員試験に合格。

伊達……………フリーの役者。「演劇集団ネバー・ランド」に客演。25歳。  
フリーター。

細谷……………北成別市の15年以上続く劇団「劇団ヨイトマケ」の役者。  
「演劇集団ネバー・ランド」に客演。22歳。大学中退、フ  
リーター。

山本……………照明屋。

信山……………情報Webサイト「札幌芸術デイリー」の編集者。26歳。

## 第一幕

札幌市内の劇場。

2011年3月5日、土曜日。本番1ステージ目終了。

舞台上には、平台や脚立、箱馬など舞台用具がむき出しで配置されている。

柴田が現れる。原稿を読み上げる。

柴田 本日はご来場いただき誠にありがとうございます。開演に先立ちましてお客様にお願いがございます。上演中、携帯電話等、音の鳴る電子機器の電源はお切りください。マナーモードになさいますとも、振動音が響くことがございますので、必ず電源をお切りください。また、会場内での飲食喫煙、許可のない撮影は禁止となっております。予めご了承ください。

柴田、次の原稿を読み上げる。

柴田 このお話は、2011年3月5日、土曜日に、北成別市の新進気鋭の若手劇団、演劇集団ネバー・ランドが、札幌公演の1ステージ目を終えたところから始まります。なお、この物語はフィクションであり、劇中に登場する人物、地域、劇場、劇団は架空のものです。実在する人物、団体、地域、劇場、劇団とは一切関係がありません。予めご了承ください。

柴田、鍵盤ハーモニカをもつ。

柴田 それではきいてください。「猫ふんじやった」。

柴田は一曲演奏する。

柴田 本日はご来場いただき誠にありがとうございました。パフレットに挟まれているアンケートにご協力ください。筆記用具をお持ちでないお客様はお手を挙げてスタッフまでお知らせください。またロビーにて今回の上演台本を販売しております。よろしければ、お帰りの際にお買い求めください。本日はご来場いただき誠にありがとうございました（お辞儀）。

柴田は去る。

少しして音楽。

役者たち（小佐部、玉井、有田、辻、伊達、細谷）が現れる。辻は顔面白塗り、白い衣装を着て、脚立の上にいる。

終演後、役者たちが舞台に集まって喋っている。

少しして音楽がなくなり、役者たちの声が聞こえてくる。

細谷 そんなときはあたし（劇団サガミの）スタッフの手伝いで入ってたんですよ。そしたら稽古終わりにサガミさん（劇団サガミ代表）に「スケジュールのことで相談あるんだけど時間大丈夫？」みたいにかかれて、「あ、終電までなら大丈夫ですよ。」

って言うって、そしたらなぜかカラオケに連れてかれて、え？  
って思うじゃないですか。それであの人食べ物オーダーして、  
いきなり歌入れでしたんですよ。しかもジャンプ。それで  
あの何曲か歌って、全然スケジュールの話になんないんで  
すよ。しかもサガミさん今度お酒頼みだして、それであの人  
酔ったらひどいじゃないですか。なんか急にあたしの横に座  
ってきて。それで肩に手とか回してくるんですよ。え、これっ  
てもしかしてとか思ってた、そしたら「俺とキスしてみない？」  
とか言うんですよ。はあ？とか思ってた、「いや、あの、スケジ  
ュールの話しないなら帰ります。」って言うって、慌てて出てっ  
て、そしたら帰り際に「他の人はみんなしてくれただけど  
ね、まあ、キミはその調子で頑張ってる。」とか言われて、はあ？  
って感じじゃないですか。

有田 それヤバイですね。

細谷 ヤバイんですよ。だからもう絶対あたしサガミさんとは  
関わりたくないですもん。

辻 なんかもあれなんですかね、北成別の演劇界ってみんなそん  
な感じなんですかね。

伊達 いやだからさ、やっぱり劇団の代表とかやってるわけじ  
ゃない？ だから自分はすごいっていう自負があるというか  
さ、

有田 つつうか「他の人はみんなしてくれただけ」つつうのもヤバ  
くないすか。

細谷 ヤバイんですよ。だからあたし次の日稽古場行って、役  
者とか見て、ああ、この女はみんなサガミさんに食われた  
のかって思って泣きそうになりましたもん。

有田 いやー、でも僕だったら、細谷さんは無理だな。

細谷 え、無理ってなんですか！

有田 いやー無理だなー。

細谷 は、なんですかそれ！

山下が現れる。

山下 あ、すみません、ロビーにまだお客さんいるんで、ちよつ

と抑えてください。

細谷 あ、すみません。

有田 すみません。

山下が去る。

細谷 (さつきより小声) 無理ってなんですか。

有田 いやー、(伊達に) だって細谷さんは無理だよ。

伊達 だからそれはさ、とりあえず女はみんな食っちゃおう精  
神っていうか、好き嫌いなくとにかく食べれそうなものは全  
部食べるみたいなさ、

細谷 え、それおかしくないっすか？

有田 だからむしろ細谷さんはサガミさんに感謝しないといけ  
ないんじゃないっすか？ なんて断ったんすか？

細谷 ちよつと待ってくださいよ。だっていいおじさんですよ。  
気持ち悪いじゃないですか。それにあたし彼氏いますから。

伊達 二次元にね。

細谷 いや、ちゃんと三次元にいますから。

伊達 うんわかったわかった。

細谷 いや、本当ですからね。

辻 でも、なんか、サガミさんの作品って、別に面白くないですよね。

有田 いや、面白くないっていうか、やっぱり古いんだよね。なんか70年代の演劇ずっと引きずってるっていうか、もう2011年だぞっていう(笑)。

辻 いや、そうすよね。

有田 やっぱりキタナン(北成別市の略)で演劇やってる人たちって、全体的に時代遅れだからさ。ウチらみたいに新しいことにチャレンジしてこうっていう劇団がないじゃない。

細谷 それすごくわかります。だからあたし小山さんって本当すごいと思うんですよ。

有田 演劇ってやっぱり芸術なわけじゃない。なんか結構キタナンの芝居ってドラマみたいっていうかやっぱりストーリーを追っちゃうっていうかさ、でも小山さんの演劇って、なんているかストーリーを理解するっていうか、もっとダイレクトに感じるっていうかさ、絵画で言ったら抽象画みたいな、そういう新しさがあるんだよね。

細谷 いや本当そうなんですよ。冗談とか抜きにして、30代とか40代とかのヤツら入れてもキタナンで今一番面白い劇団だと思いますもん。

伊達 それは言い過ぎじゃない?

細谷 いや、まあもちろんあたし個人の意見ですけど。

伊達 俺はやっぱりわかりやすいのがいいからさ。

有田 はい、だから、それはそれでいいと思いますよ。俺は。

伊達 でもやっぱネバー・ランドのメンバーは小山の作品好きだよな。

有田 いやそりゃあ団員ですから。

伊達 一番すごいのは佐竹だよな。

細谷 だって佐竹ちゃんは小山さんのこと教祖かなんかだと思ってるすよね?

辻 いやいや、それは言い過ぎですよ。

有田 あれ、ってか佐竹は?

辻 ああ、佐竹は、ロビーで客出ししてます。

有田 あ、そうなんだ。

辻 はい、ずっと小山さんの隣いましたよ。

有田 ああ、なるほどね。

細谷 え、なるほどってなんすか。

有田 いや、なんでもないすよ。

辻 なんでもないすよ。

細谷 え、なんすか。教えてくださいよ。

有田 いやいや、

山下が現れる。

山下に続いて、小山と佐竹、柴田、信山が現れる。

山下 お疲れ様です。お客さんいなくなりました。完パケです。お疲れ様でした。

一同 お疲れ様でした。

山下 えーとじゃあ演出から。

小山 お疲れ様でした。

一同 お疲れ様でした。

小山 うん、まあ今日のステージは悪くはなかったんじゃないかな。札幌のヤツらになんかしら爪跡は残せたと思うね。ただ言うなれば、やっぱりもう少しおのおののパトスがもっとリンクして高めあっているとよかったかな。特に終盤の群読、あそこがもっとリンクしていけると最高だったかな。まああとは、やっぱりもうちょっと多くのお客さんに見て欲しかったな。まあ結局札幌ってというのは、演劇人どうしが見合っつて、純粹に演劇を観る人口は少ないってことですよ。

そういうところがやっぱりキタナンとは違うんだよなあ。あ、そうだ、(照明席に向かつて) 山本さん？

山本 はい。

小山 最後のシーンの、アルテミシアの独白のところなんですけど、もう少し彼女の静かなパトス、つまりは静かな熱情を感じるような照明でお願いできますかね。

山本 わかりました。ちよつとやってみます。

小山 お願いします。では以上です。お疲れ様でした。

一同 お疲れ様でした。

山下 えーとじゃあ制作から。

柴田 お疲れ様でした。

一同 お疲れ様でした。

柴田 今日の動員は43人でした。アンケートは24枚で回収率は55.8%でした。

小山 明日の動員は？

柴田 明日の動員予定は36人です。札幌の知り合いのいる人は、今からでももうワンプッシュしてみてください。

一同 (返事)

柴田 以上です。それで、とりあえずこの劇場は22時までいられるんですけど、ホテルとってる人はホテル行ったり、友達の家泊まる人はもう行つて大丈夫です。以上です。

山下 はい、それじゃあお疲れ様でした。

信山 あ、すみません、

柴田 あ、それであの、この前言った編集者の方がいらつしやつてます。(信山に)えーと、まだ残つてもらつた方がいいですよね？

信山 あ、ええとみなさんこんばんは、札幌で「札幌芸術デイリー」というWebサイトを運営してます信山といいます。今回、北成別市で飛ぶ鳥を落とす勢いのネバー・ランドさんが札幌にやってきたとききまして、よかつたらインタビューさせていたただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

一同 よろしくお願ひします。

小山 あーそれじゃあちよつと舞台中央あたりに椅子並べて、じゃあ哲(＝有田の名前)と佐竹ちよつと座ろうか。

有田 はい。

佐竹 え、私ですか。

小山 うん、座つて。

佐竹と有田は座る。

小山 ……いや、逆だな。座る位置逆にして。

佐竹と有田は場所を入れ替える。

小山 うん、オツケーオツケー。

小山、佐竹と有田の間に座る。

信山 あ、すみません、ちよつとビデオカメラ用意しますね。

小佐部 あ、僕ロビー行ってもいいですか。

小山 うん大丈夫。ですよね？

信山 あ、えーと、はい。また戻ってきましたすよね？

小佐部 ええ、大丈夫です。ちよつとアンケート読みたいんで。

信山 はい、どうぞ。

小佐部 じゃ、すみません。

山下 あ、小山さん、22時までで。

小山 うん、わかってる。

柴田 (信山になにかあったらロビーいるので呼んでください。

信山 あ、はいありがとうございます。

小佐部と山下、柴田は去る。

小山 山本さん、ちよつと照明いただいていいですか。ここが

目立つ感じで。

照明、小山たちがいるあたりに斜めからの光。

小山 うん、ありがとうございます。

信山 あーかつこいいですね。それじゃあ、すみません。お願いします。

信山、ビデオカメラで録画する。

信山 えー、劇団ネバー・ランドのみなさま、

小山 あ、すみません、「演劇集団」ネバー・ランドです。

信山 はい？

小山 「劇団」じゃなくて「演劇集団」ネバー・ランドです。

信山 あ、失礼しました。えー、演劇集団ネバー・ランドですね。

小山 いや、それは実際にそういう狙いがあったって、僕たちは、今までの劇団とは違った新しい演劇スタイルを狙っていて、だからなるべく「劇団」っていう言葉、というか「劇団」という言葉のもつイメージですよ、そのイメージとは一線を画した演劇団体という意味もあって、あえて「劇団」でなく「演劇集団」という言葉を使っているわけです。

信山 はあーなるほど。ちゃんとそういうところにも深い意味があるんですね。なるほど。なるほど。では、劇団ネバー・ランドのみなさま。

小山 演劇集団です。

信山 あ、すみません。演劇集団ネバー・ランドのみなさま、本日はご協力いただきありがとうございます。では、これから色々とお聞きしていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

三人 よろしくお願ひします。

信山 ああの、いきなり核心を突くかもしれない質問をさせていた  
ただきたいのですけれど、

小山 ええ。

信山 今回の舞台、平台とか箱馬とか、結構むき出しで置いて  
ありますよね。普通こういうのって、なんていいましたっけ、  
ベニヤとかパンチみたいなの貼って見えなくするじゃないで  
すか。やっぱりこれはわざと、こう見えるようにしてるん  
ですか。

小山 そうですね。この舞台はブレヒトの舞台を意識している  
んですよ。

信山 ほう。

小山 つまり、こうやってわざと粗末な舞台装置にすることで、  
観客と一定の距離を保って批判的な思考を促すことによつて  
物事の本質に迫らせるという手法がとられてるんですよ。ま  
あいわゆる非アリストテレス的な手法ですよ。

信山 なるほど。

小山 やっぱり演劇っていうのは、僕はある真理をついていな  
ければならないと思つていて、ただ主人公が悪役を倒して恋  
人を救つてハッピーエンドみたいな、そういうものにはあま  
り価値がないと思つているんですよ。やはりテレビドラマ  
とか、北成別の演劇もそうなんですけど、頭使わなくても見  
れちゃうじゃないですか。僕はもうそういうのはとくに飽  
きていて、人というのは芸術に触れるときは頭を使わなくち  
ゃいけないと思うんですよ。やはり僕の思う演劇っていう  
のは、さっき言ったように真理をつくだとか、物事の本質を  
つくだとか、それはつまり、我々が住んでいる世界よりも上

位の、いわゆるアイデア界的な抽象的概念を表現することが重  
要だと思つているんですよ。だから僕はちよつと不満に思  
つてることがあつて、北成別つて演劇札幌よりレベルが高い  
らしいんですよ、

信山 あ、へーそうなんですね。

小山 しかしはつきり言つて、北成別の30、40、50代くら  
いの劇作家・演出家で、僕がさっき言つた演劇の本質とい  
うか、真理ですかね、を理解している人というのは誰ひとり  
していませんね。

信山 あ、へーそうなんですね。

小山 つまりはコントかメロドラマか、あるいは浅はかな人間  
賛歌ですよ。彼らにとつて演劇つてのは単なる気晴らしなん  
です。あーすつきりした、あー楽しかったで終わりですよ。世  
界の本質をつかもうとしている人なんて誰ひとりとしていな  
いんです。だからやっぱり僕たちが、真の演劇つていうもの  
をきちんと作つていつて、北成別をリードしていかなきゃい  
けないんです。これは、やっぱり天才に課せられた使命なん  
だと思ひますね。

信山 あーなるほど、演劇集団ネバー・ランドは北成別を背負  
つていつていつていうことなんですね。

小山 ええ、そうなりますね。

信山 ーなるほどなるほど。ちなみにみなさま今おいくつと  
いうか、まだ学生の方々ですか。

小山 ええと、僕と役者の小佐部はもう卒業 していつて、有田  
とさっきの舞監の山下、制作の柴田、あと玉井が今年卒業で、  
辻が今就活中ですね。

辻にサス。

辻 おお、

信山 あの僕さつきからちよつとききたかつたんですけど、彼は顔の白いのはとらないんですか。

辻 いや、あのこれはちよつと落とすのが面倒くさくて、風呂に入るときついにとればいいやと思つて、

信山 あ、なんか深い意味とかは特にないんですね。

辻 あ、はいないですすみません。

信山 いやすみません、ちよつと気になったので。

小山 それでこの、今日主役をやつた佐竹はまだ一年生なんですよ。

信山 あ、え、まだ一年生なんですか。

佐竹 あ、はい、あのそうなんですよ。

信山 すごいなんか、(小山に)堂々と演技 なさつてましたよね。

佐竹 いやあの、

小山 彼女は、すごい才能を持っているんです。いわゆる熱情、僕たちはこれをパトスと呼んでいるんですけど、僕の書く芝居はこのパトスがとても重要になってくるんですね。彼女は

このパトスのエネルギーがとても強いんです。

信山 あーなるほどそうなんです。(佐竹に)どのようないきさつでこの劇団に入られたんですか。

佐竹 あ、あの、すみません、ちよつとうまく言えるかわからないんですけど、私すごい高校生のときから絶対私は女優にな

るって思つて、でもそのときはテレビドラマとかの女優さんに憧れてたんですけど、小山さんの演劇を見て衝撃を受けたというか、とにかくすごいっていうか、すごいすごかったです。小山さんつて、すごいいろんなこととか、すごい難しいこととか知つてるし、だからすごく尊敬してますし、私は北成別で一番すごい劇作家・演出家だと思つていてだから、私なんか小山さんと一緒に芝居できるなんて嘘みたいだと思つてて……、本当に、嘘みたいだと思つてて……、

佐竹、感極まって喋れなくなる。

小山 うんうん、大丈夫、佐竹頑張つてるから、もっと自信持つて大丈夫。

佐竹 すみません……、

小山 ……(信山に)あ、すみません次行つて大丈夫ですから。

信山 あ、そうですか、すみません。有田さんは小山さんの作品についてはどう思つているんですか。

有田 僕は、まあやっぱりすごいと思ひますね。すごい僕なんか全然思ひつかないような感じとがありますし、

柴田が現れる。

柴田 あ、佐竹ちゃん、今大丈夫？

佐竹 あっはい、なんです？

柴田 なんか今日川上さん？とかいう人が観に来てたみたいで、時間あるときに話したいって言つて連絡先置いていた

んだけど。

佐竹 あっえーと、

小山 いや、いいよ行つといで。

佐竹 あっはい、すみません。

佐竹、柴田から連絡先の書いてある紙を受け取って、携帯電話を取り出す。

柴田 あ、ケータイ外の方が繋がりやすいよ。

佐竹 あっはい。

佐竹は去る。

信山 あーすみません、もう一度お願いしても大丈夫ですか。

有田 ああはい。僕は、まあやつぱりすごいと思っついていて、

山本 (照明席から) あ、すみません、ちょっととそろそろ照明直したいんですけど、場所もらえたりしますか？

小山 あーすみません、じゃあ、よろしくお願いします。あ、じやあ続きはロビーの方でも大丈夫ですか。

信山 あ、わかりました。

山本 あ、小山さん、舞台上の脚立使っても大丈夫ですか。

小山 あ、はい、大丈夫です。

山本 ありがとうございます。

雰囲気のある照明が解かれる。

小佐部、山下が現れる。

小佐部 あ、終わったの？

小山 いや、照明さんがちょっとアレするから、ロビーに移動。

小佐部 あ、了解す。

山下 あ、(午後) 10時までなんで、9時45分くらいにはお願いします。

小山 はい。

小山と信山、有田は去る。

山本は脚立を出して照明を直し始める。

一同、山本の作業中に会話することになるが、辻は山本が脚立を必要としそうなタイミングで「すみません」と言っつて、脚立から離れる。小佐部は山本が脚立に登り始めたあたりで「あ、何か手伝いますか」ときが山本は「いや、大丈夫です」と答える。

山下 (インタビュウを受けていたのは) ずっとあの3人だった？

辻 あーそうですね。

山下 あ、じゃあみんなは特に何もきかれず？

辻 そうですねはい。

小佐部 小山すぐ哲と佐竹選んだからなー。

辻 やつぱそうですね。俺もそう思っつたんですよ。

小佐部 どうせアレでしょ、小山を称える会みたいになっつたんですよ。

辻 まあ近いところはありましたね。

山下 たまちゃん、元彼さんなんとかしてよ。

玉井 知らねえよ。

小佐部 知らねえよ（笑）。

辻 たまちゃんさん、超不機嫌でしたよ。

小佐部 んーまあ気持ちわかるよ全然。

玉井 （超不機嫌でしたよ。に対して）別に普通だよ。

細谷 小山さんって佐竹ちゃんのこと好きなんですか。

小佐部 ……うん、いや、っていうか付き合ってるからね。

細谷 あ、えっそうなんですか。

玉井 うん、だからよかったじゃん両想いで。ハッピーハッピー。

細谷 （小佐部に小声で）あつすみません。

小佐部 いや、でもたまちゃん哲と付き合ってるんじゃない。

細谷 え、そうなんですか。

玉井 うん、だから別に全然気にしてないよ。

小佐部 あっそう。

玉井 うん、全然。

小佐部 （伊達と細谷に）あ、今回は客演していただいてありがとうございます。

伊達 あーいやいや、

細谷 いえいえ、

小佐部 細谷さんは、やっぱり違いますかねこと自分とこと。

細谷 あー違いますね。ウチは演出がもう50手前なので、け

っころ古き良き演劇みたいな感じがあるので、小山さんはや

っぱり新しいことしようとしている感じがして、すごい勉強

になります。

小佐部 あ、ありがとうございます。あの、なんか気に入らない

細谷 いやいや、本当にありがたいです。

小佐部 いえいえ。伊達さんもあります。

伊達 ありがとうございます。

小佐部 伊達さんは結構いろんなところ客演してますけど、ウチ

はどんな感じですかね。

伊達 俺は、どうして俺はこんなところにいるんだろうって思

うね。

小佐部 そうすか（笑）。

伊達 いやーもちろん呼んでもらえるのはありがたいし、すご

く勉強にもなるし、基本的にはあいつの考えとか好きなんだ

けど、ひとつ不満があるとすれば、なんかあいつの言ってる

ことってすごく難しいんだよ。

小佐部 あーそうですよね。

伊達 だから便所じゃなくてWCみたいな。

小佐部 ……あー…？

伊達 だから便所って言ったら便所じゃない。でもWCって言

ったらすごい哲学的な便所みたいな感じがするじゃない。

山下 ……だからつまり、難しい言い回しをするみたいな意味

ですよね。

伊達 そうそう、そういうこと。

細谷 でもそれはやっぱりニュアンスの問題っていうか、便所

って言うニュアンスと、WCって言うニュアンスはやっぱり

違うじゃないですか。だから小山さんの求める演劇は便所的

な演劇じゃなくて、もっとWC的な演劇だっていうことなん

だと思えますけどね。

辻 うん、それは俺もそう思うんですけど、なんかもうちよっ

と例え変えてくれませんか。なんかウチがトイレ演劇作ってるみたいな感じになっちゃいますから。

山下 なんだよトイレ演劇って(笑)。

伊達 それだよ。トイレ演劇だよ。俺はトイレ演劇を目指すべきだと思っただよ。

小佐部 うーん拒否します。僕たちそんなにトイレに興味ないです。

伊達 いやだから、つまり便所演劇でも、WC演劇でもなくて、トイレ演劇を目指すべきだと思っただよ。

一同 ……?

伊達 あれ、なぜわからない?

辻 すみません、ちよつとわかんないです。

伊達 だから、便所って言ったらちよつと下品じゃない。でもWCって言ったら上品すぎるのさ。でもトイレだったら下品じゃないし上品すぎないじゃない。

山下 だからつまりちよつといいところがいいってことですよね。

伊達 そうそう、そういうこと。

小佐部 あーなるほどね。伊達さん通訳の人つけた方がいいんじゃないですか?

伊達 はい? どういう意味だ? 誰か彼の言ってることを通訳してくれ。

一同 (笑)

辻 伊達さんって面白いですよ。

伊達 え? それはバカにしてるのかい?

辻 いや、これは本当に、単純に尊敬してます。

伊達 おう、だしよ?

細谷 「だしよ」ってなんですか。

伊達 「だろ」と「だしよ」が混ざったんだよ。

細谷 いや、わかりますけど。

山下 ねえ辻くんさあ、このあたりの温泉調べといってくれた?

辻 あーはいはいあの、駅から歩いて2分くらいところに「アトホテルズ札幌」っていうところがあるんですけど、そこ25時まで温泉やってますよ。

山下 え、それって温泉だけとか入れんの?

辻 ああ、別に宿泊しなくても温泉だけ入れるみたいですよ。

山下 おし。じゃあ行くぞ、辻。

小佐部 あれ、ホテルに風呂くらいいついてるでしょ。

山下 あたしのホテル温泉じゃないんですよ。なんか少し大きい風呂みたいな、全然テンション上がんないヤツ。

小佐部 あー温泉じゃないとダメなんだ。

山下 あたし旅行先では絶対に温泉に行くんですよ。辻くんもそうですから。

小佐部 あ、そうなの?

辻 はい、そうなんですよ。

小佐部 あーわかるわー。温泉好きって言われたらすごい納得するわー。

辻 はい、それみんなから言われます。

小佐部 あーだよー。

山下 小佐部さんも行きます?

小佐部 いや、俺はいいわ。

山下 細谷さんと伊達さんどうですか?

細谷 いや、あたしも大丈夫です。

伊達 俺もいいや。

小佐部 つつうか辻くんはその顔面で行くの？

辻 あ、はい風呂入るときに一緒に落とそうかなと思って。

小佐部 マジで、なんかすごい存在感あるよ。

辻 あー、大丈夫じゃないですかね？

小佐部 あ、そうすか。じゃあいつてらっしやい。

辻 はい、行ってきます。

山下 行ってきまーす。

佐竹が現れる。

辻 あ、佐竹。佐竹も行く？ 温泉。

佐竹 温泉？

山下 駅から歩いて2分くらいのところにあるんだけど。

佐竹 ああ、いや私はいいです。

辻 あっそう。じゃ、行きましようか。

山下 おう。お疲れ様です。

辻 お疲れ様です。

一同 お疲れ様です。

山下と辻は去る。

佐竹 あの、小佐部さん。

小佐部 ん？

佐竹 ちょっと相談したいことがあるんですけど。

小佐部 なに？

佐竹 もし、東京の有名な演出家から、ウチで芝居やらないかって言われたら、小佐部さんなら行きますか？

小佐部 ……うん、行くよ。

佐竹 あー、そうですか…。

小佐部 ……なんで？

佐竹 あの、今日、川上さんっていう人がこのお芝居を観に来て、それでなんかすごい私と連絡をとりたみたいなのアレがあつて、誰だろうって思ってた電話かけてみたんですよ。そしたら、みなさんも知ってると思うんですけど、東京で演出家をやってる川上慶一郎さんっていう人で、

小佐部 ……あそう。

佐竹 なんか札幌に親戚がいるとかでたまたま来てたみたいで、それで本当にたまたまなんですけど、なんかアレしてたみたいで、

小佐部 うん。

佐竹 それで、東京で芝居やらないかって言われて。

小佐部 ……。

佐竹 でも、断ろうと思うんです。

小佐部 ……はい？

佐竹 私小山さんのもとは絶対に離れたくないんです。私、小山さんと離れるのはすごい寂しいっていうか怖いっていうか、小山さんと離れるのはすごい辛いんです。

小佐部 ……キミ、女優になりたいんだよね？

佐竹 そんなのなりに決まってるじゃないですか。

小佐部 じゃあ東京行くしかないでしょ。

佐竹 いやでも、やっぱり小山さんが許してくれないっていうか、私、小山さんなしには生きていけないんです。

小佐部 てめえ殴るぞ。  
佐竹 嫌です。

小佐部、佐竹を殴る。

小佐部 早く電話しろよ。川上さんの気い変わらねえうちに、早く電話しろ。

佐竹 でも小山さんが、

小佐部 (佐竹を蹴って) 早く電話しろよ。

佐竹 はい、すみません。

佐竹は楽屋側から去る。

細谷 え、マジですか？ 川上さん？

小佐部 ……いやわかんないけど、佐竹の妄想かもしれないよ。

細谷 いや妄想ってことないでしょ。

玉井 でもこれってアレってことですよ、要は、川上さん全部の役者見てるってことだから、佐竹が一番可能性を感じる役者だったっていうことですよ。

小佐部 いや、そういうこと言わないですよ。自信なくしちゃうから。

細谷 (玉井の発言に対して) いや、つつうかそれ悔しいですよ、

だって佐竹ちゃん役者なんてほとんど初心者なのに。

小佐部 ね、細谷さんもう4年目のにね。

細谷 ちよつとそういうこと言わないでくださいよ。マジでへこむじゃないですか。

小佐部 やっぱり佐竹の妄想なんじゃないかな。川上さん札幌になんていないよ。

細谷 いや、だからたまたまいたんでしょ。

小佐部 そうかあ、なんかムカつくなあ。

細谷 ムカつきますよね。

小佐部 だよ。ムカつくよね。ちよつとマジで佐竹一発殴ってこようかな。

細谷 いや佐竹ちゃん泣いちゃいますから。

小佐部 いんだよそれくらい。川上さんとこいけるんだから。

信山が現れる。

信山 お疲れ様です。

一同 あ、お疲れ様です。

信山 ちよつとお時間よろしいですか。

小佐部 あ、むこうの人たちは、もう終わった感じですか。

信山 はい。たくさん話していただきました。あの、制作の柴田さんって天然なんですか？

小佐部 ああ、彼女天然ですよ。

信山 すごい、面白い方なんです。

小佐部 そうですよ、本当はすごい役者にむいてると思うんですけど。

信山 あーそうですよね。

小佐部 むこうは帰りました？

信山 あーいえ、なんかアンケートを読むって言うてました。  
小佐部 あーそうか、本当はあんまり見ないほうがいいと思う  
んだけど、

信山 あれ、なんかあるんですか？

小佐部 あーいえいえ、全然問題ないんですけど。

信山 ああそうですか。それじゃあすみません、ちょっとお話を伺いたいですけど。

小佐部 あーじゃあ伊達さんトイレ演劇の話をししましょう。

信山 え、なんですかトイレ演劇って？

小佐部 これすごい興味沸きますよね。よし、伊達さんトイレ演劇の話をお願いします。

信山 お願いします。

伊達 わかりました。じゃあちよつとイス並べて。

細谷 あ、はい。

小佐部と細谷、イスを並べる。

伊達 座って。

小佐部と細谷は座る。

伊達 ……いや、逆だな。

小佐部と細谷は場所を入れ替える。

伊達 山本さん、ちよつと照明いただいてもいいですか。ここ

が目立つ感じで。

照明、伊達たちがいるあたりに斜めから光。

伊達 はい、ありがとうございます。

信山 それじゃあすみません、お願いします。

柴田が現れる。

柴田 すみませーん、あと30分で退館時間です。

小佐部 あ、今ちよつと（録画してるから）

柴田 あ、すみません。

伊達 あの、さっきも言ったんですけど、俺たちはトイレ演劇をやらなきゃいけないと思うんですよね。

信山 ほう、そのトイレ演劇っていうのはどういうものなんですか。

伊達 だから、つまり便所演劇っていうのと、WC演劇っていうのがあるじゃないですか。でも俺たちはトイレ演劇をやらなきゃいけないんですよ。

信山 ……えーと、その便所演劇とWC演劇っていうのはどういうものなんでしょう。

伊達 だからつまり、便所ってちよつと下品じゃないですか、でもWCだと上品すぎるんですよ。だからトイレがベストなんですよ。

信山 ……あー、えーと……。

伊達 あれ、わかりませんか？

信山 いや、あの、便所とWCとトイレは同じものですよ？  
伊達 俺の話きいてましたか？ 便所は下品なんですよ。でも

WCって哲学的な便所じゃないですか。ここまではわかりますか？

信山 WCが哲学的な便所……？

伊達 そうです。WCは哲学的な便所ですよ？

信山 いや、えーと、さっきの小山さんの話しもすごく難しい  
と思ったんですけど、その比にならないくらい難しくくて、  
ちよつと僕にはわからないですね。

伊達 どこがわからないんですか？

信山 えーとどこがわからないというか、全体的にわからない  
というか、

柴田 だから中庸がいいってことですよ。

伊達 チュウヨウ？

柴田 だから、手垢にまみれたあたりきたりな表現は避けつつ、  
でも気取り過ぎたり堅苦しすぎたりする表現にならない、ち  
ようどいい表現を常に心がけなきゃいけないっていうことで  
すよね。

小佐部 おお。

伊達 そう、つまりそういうことなんですよ。

信山 あーなるほど、ちようどいいところを狙わなければいけ  
ないと、そういうことなんですね。

伊達 そうです。それがトイレ演劇なんです。

信山 あーなるほど。ありがとうございます。危うく彼の迷宮  
から抜け出せないとこでした。

細谷 伊達さんはすぐに迷宮作り出しますから、注意した方が

いいですよ。

信山 はい、気をつけます。

伊達 全然迷宮じゃないよ。一本道です。

信山 ……はい、わかりました。あの、今日はもうアレなんです  
けど、明日も観ていきますので、もし時間ありましたら、もう  
少しじっくり、さつき帰っちゃった方々も一緒に話伺いた  
いと思うんですが、大丈夫でしょうか？

柴田 はい、たぶんちよつと時間余ると思うので、そのときに  
でもまた。

信山 ありがとうございます。それではお疲れ様です。今日は  
ありがとうございました。明日もよろしく願います。

一同 よろしく願います。お疲れ様です。

信山 お疲れ様でした。

信山は去る。

細谷 ちーちゃん（＝柴田のあだ名）よくさっきのでわかりました  
よね。

柴田 すごいでしょー。

細谷 （小佐部に）なんか、ちーちゃんって意外としっかりしてま  
すよね。

小佐部 うん、ちやつかり4月から公務員だしね。

細谷 えーどこで働くの？

柴田 一応市役所です。

細谷 北成別の？

柴田 あ、はいそうです。

細谷 うわーすっかりしてる。

小佐部 ここ3人は見事にみんなフリーターだからね。

細谷 本当ですよ。

柴田 いやでも、そんなこといったらコナミちゃんの方がすごいですよ。

細谷 山下さん？

小佐部 4月から劇場で働くんだって。

細谷 え、劇場ってどこのですか？

小佐部 北成別ふれあい劇場。

細谷 え、ふれあいですか。うわーすごい、いいなー。

伊達 やめて、そういう話しないで。やめてー。

柴田 そろそろ（帰る）準備してくださいねー。

一同 （返事）

細谷 ちーやん、それ（服）ウラオモテ逆じゃないですか？

柴田 え？ ……！ なんだよこれ。早く言ってくれよ。これで受付しちやったよ。なんだよ。うわー。

小佐部 はいはいもう出るよ。

柴田 うー。なんだよー。

玉井 あ、伊達さん、ちよつといいですか。

伊達 ん、なに？

玉井 伊達さんって、確かお笑い好きですよ？

伊達 ああうん、

柴田 たまちゃん、45分までね。

玉井 うんわかってる。（伊達に）イノシシサンドって知ってます？

伊達 え、それなに芸人？

玉井 ちよつとマイナーなんですけど、

小佐部、柴田、細谷は去る。

玉井 あたしすごいイノサンがお気に入りなんですよ。

伊達 ああ、イノシシサンドでイノサンね。

玉井 そうなんですよ。

玉井、スマホでイノシシサンドの動画を伊達と見ようとす。伊達と距離が近い。

玉井 あーやっぱり電波悪いですね。

玉井、電波をよくするめスマホを上下左右に動かしたりする。

玉井 ダメですねー。あとで地上出てからみましょう。

伊達 ああうん。

玉井 伊達さんって、このあとはホテルですか。

伊達 ああうん、そう。

玉井 ホテルでなんかするんですか。

伊達 いや、まあお風呂入ってすぐ寝ようっかなって思ってるけど。

玉井 あーそうなんです。私すごいどうしようかなって思ってるんですけど、昨日は札幌の友達の家泊まったんですけど、今日その友達都合悪くなっちゃって、今私困ってますよ。

伊達 ああそうなんだ。でも、たぶんその辺のホテル空いてると思うけど。

玉井 でもあたし今すごいお金ヤバいですよ。泊まるお金もなくて。

伊達 ああそっか。

玉井 それで伊達さん、お願いがあるんですけど、もしよかつたら伊達さんのところにこっそり泊めてもらえませんか。

伊達 え、いやーでも難しいんじゃないかな。

玉井 大丈夫ですよ、こっそり行けば。

伊達 でも、じゃあコナミちゃんのとこ泊めてもらえばいいんじゃないかな。

玉井 うーんでも、なんていうか、私すごい伊達さんと喋りたいていうか、明日で公演終わっちゃうじゃないですか、そしたらもう伊達さんと会えなくなっちゃうし、今のうちに伊達さんといろいろ話したいんですよ。

伊達 ああそうなんだ。でも、同じところに泊まるっていうのは、だって哲のこともあるし。

玉井 いんですよ哲は。哲ってすごい子供っぽいついていうか気が利かないっていうか、すごいガキなんですよね。だから一緒にいて疲れちゃうっていうか、伊達さんってすごい気が利くし、一緒にいても楽しいし、なんていうか一緒にいて安心感があるんですよ。

伊達 ああ、そうなんだ。

玉井 いや、別に男としてっていうか人間として伊達さんいいなって思ってた、だから私今日は伊達さんと話してたいんですよ。

伊達 ああそうなんだ。いやーでもなあ。

玉井 伊達さん私のこと嫌いですか。

伊達 いや、あの別に嫌いつてわけじゃないんだけど。

玉井 すみません、なんか私すごい迷惑なこと言ってますよね。

伊達 いや迷惑ってことではないんだけど、

玉井 ……。

伊達 あ、うんわかった。大丈夫。でも本当こっそりね。誰にも言わないでよ。

玉井 はい、言わないです。ありがとうございます。やっぱり伊達さんって、優しいですよ。

玉井、伊達と距離が近い。

伊達 ああうん、でも、本当にこっそりね。ホテルの人にもバレないようにね。

玉井 大丈夫です。ホテルと一緒にイノサン見ましょうね。

伊達 ああうん、それは楽しみ。

小山と有田が現れる。

玉井 あ、お疲れ様です。

小山 ちょっとごめん佐竹知らない？

玉井 あ、なんかさつき楽屋の方から出ていきましたけど。

小山 サタケ！

佐竹の声 はい！

小山 あーいたいた。ちょっと来い。

佐竹が現れる。

佐竹 はい、

小山 ごめんちょっと稽古するからどいてもらっていいですか。  
有田 小山さん、アンケートなんてそんなに気にしなくてもいいと思いますよ。

小山 やっぱり札幌の観客はキタナンより感性が低かったんだよ。俺がたかをくくってたのが悪かったんだ。だから俺たちはバカでもわかるように圧倒的なパトスで観客をねじ伏せなきゃいけないんだ。わかるか。俺の言ってること間違ってるな  
いよな？

有田 あ、はい、間違ってるんです。

小山 佐竹、独白のポジション立って。

佐竹 はい。

柴田が現れる。

柴田 小山さん、10時退館なので、よろしくお願いします。

小山 うん、わかってる。あー、ちよつと早く舞台上からどいてもらっていいですか。

佐竹以外、返事して舞台上からいなくなる、

小山 えーとじゃあアルテミシアの独白「人も、ライオンも」くらいこう。あ、すみません、照明さん音響さんお願いします。

よーいはい。

情熱的な照明。厳かな音楽。

佐竹 人も、ライオンも、ワシも、雷鳥も、一切の生き物、生きとし生ける物は悲しいめぐりを終えて消え失せた！ しかしその魂は滅びることなくさまよい続け、遂にはひとつになり私となった！ 私はアルテミシア！ 私は非存在であり、全存在でもある！

小山、手を叩く。

照明は戻り、音響はなくなる。

小山 全然。パトスが足りない。キミは全存在なんだ、例えばアレクサンドル大王、シーザー、シェイクスピア、ナポレオン、その全ての魂がキミなんだ。そして、それら全てを統合した美しさであり醜さなんだ。俺はもつとイデア的なものが見たいんだよ。もつとパトスを高めるんだ。もう一回。よーいはい。

再び情熱的な照明。厳かな音楽。

佐竹 人も、ライオンも、ワシも、雷鳥も、

小山、手を叩く。

照明は戻り、音響はなくなる。

小山 パトスが足りねえ！ いいか、キミは全存在なんだ！  
全時間で全空間なんだ！ キミは世界を包括する存在なんだ！  
だ！ わかつてんのか！

佐竹 はい。

小山 わかつてるんだったらどうしてやらないかなあ。

佐竹 すみません。

小山、深くため息。

小山 ……うん、うん今日はもう時間もないからいい。明日日本  
番前に稽古するから、きちんと台本読んで、理解して、想像し  
て、パトスを高めてください。

佐竹 すみません。

小山 お疲れ様でした。

佐竹 お疲れ様でした。

小山は去る。

佐竹は去る。

——第一幕終わり。

## 第二幕

2014年3月1日、土曜日。本番3ステージ目終了。千秋楽の前夜。

柴田が現れる。原稿を読み上げる。

柴田 本日はご来場いただき誠にありがとうございます。開演に先立ちましてお客様にお願いがございます。上演中、携帯電話等、音の鳴る電子機器の電源はお切りください。マナーモードになさいましても、振動音が響くことがございますので、必ず電源をお切りください。また、会場内での飲食喫煙、許可のない撮影は禁止となっています。予めご了承ください。

柴田、次の原稿を読み上げる。

柴田 このお話は、2014年3月1日、土曜日に、北成別市の新進気鋭の若手劇団、演劇集団ネバー・ランドが、札幌公演の3ステージ目、翌日の千秋楽を残し、全てのステージを終えたところから始まります。

柴田は去る。

少しして音楽。

役者たち（小佐部、玉井、有田、辻、伊達、細谷）が現れる。辻は顔面白塗り、白い衣装を着て、脚立の上にいる。

終演後、役者たちが舞台に集まって喋っている。

少しして音楽がなくなり、役者たちの声が聞こえてくる。

細谷 だからなんかすごい鬱々としてて、ツイッターとかもひどいじゃないですか。「今俺が死んだとして世界はなにか変わるだろうか。」とか「アリをちようど百匹潰した。こやつて弱い者は強いものに殺されていく。」とか。なんか結構ヤバめのツイート多いじゃないですか。いや別にそれだけならいいんですけど、すごいあたしたちが稽古遅刻したらすごい怒るくせに、自分はすごい、しかも無断で稽古とか遅刻してくるじゃないですか。あたしそれすごい腹立つんですよ。

有田 いや、だから小山さんも、なんていうか、ちよつとスランプというか、すごい焦ってるっていうか小藤田（ことうだ）くんとか出てきちゃったじゃないですか。だからすごい立場がないというかなんというか、

伊達 え、その小藤田ってだれ？

細谷 え？ 伊達さん小藤田くん知らないんですか。

伊達 だれ？ 芸人？

有田 あの、小山さんの3つ下の世代で、劇団キャプテン・フックっていう劇団があるんですけど、きいたことないですか。

伊達 あー、なんか折込チラシは見たことあるわ。

有田 今すごい、北成別新進気鋭の若手って言われてて、だから3年前の僕たちみたいなの、だからすごい今キタナンで注目されてるんですよ小藤田くんが。

伊達 へーそうなんだ。

有田 だからなんていうか小山さんもあんまり注目されなくな  
ったってどうか、来週ここでキャプテン・フックが公演する  
らしいんですけど、3年前信山さんっていう編集者の人来た  
じゃないですか。なんかその人もキャプテン・フックのこと  
取材するみたいで、だから、すごい小山さんも焦ってんす  
よ。

細谷 でも、別にだからってあたしたちに強くあたる理由には  
ならないじゃないですか。

有田 いや、それはもちろんそうなんですけど、

細谷 小山さんおかしいですよ、そういうことするから信用な  
くすんじゃないですか。

有田 いやだから、でも細谷さんだって遅刻するじゃないです  
か、別に人のこと言えないじゃないですか。

細谷 いやそうですけど、小山さんの態度が問題なんですよだ  
から。

山下が現れる。

山下 あ、すみません、ロビーにまだお客さんいるんで、ちょっ  
と抑えてください。

有田 あ、すみません。

細谷 すみません。

山下が去る。

有田 (さっきより小声で)それに、だから佐竹のこともいろいろ

あつたってどうか、

細谷 いろいろってなんすか。

有田 だから、なんかメアドとか電話番号とかも変えたかなん  
かで全然アレらしいっつうか、

細谷 だってそれは仕方ないじゃないですか。佐竹ちゃんが小  
山さんのダメさ加減に気づいたっていうだけじゃないですか。

有田 え、細谷さんなんでウチに客演したんすか。

細谷 え？ いやそれは、だってこんなんだって知らなかった  
し、

有田 いやでも、やっぱ出ることになったからにはちゃんと仕  
事しないといけないと思うんですけど。

細谷 は？ いや、だからあたしちゃんと仕事はしてんじゃん。  
有田 いや、でも細谷さん雰囲気悪くてますよ。

細谷 いや、雰囲気悪くしてんのはあたしじゃなくて小山さん  
でしょ。

伊達 まあまあ、そんなケンカしても仕方ないから。

山下が現れる。

山下に続いて、小山と柴田が現れる。

山下 お疲れ様です。あ、お客さんいなくなりました。完パケ  
です。お疲れ様でした。

一同 お疲れ様でした。

山下 えーとじゃあ演出から。

小山 おいホソヤ！ お前はなんで最初の独白毎回とちるんだ  
よ！ 何回目だよ！ いい加減セリフちゃんと覚えろよ！

お前何年演劇やってんだよ？

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

---

## 演出ノート

今回の台本については、台詞は一言一句きっちり覚えずに構いません。似たようなことを言えばひとまずオッケーです。使う言葉も、例えば「感動する」を「グッとくる」に変えるだとか、適宜自分の使いやすい言葉に変えてもらって構いません。

今回は出来事というよりも人物の描写に重点を置いたつもりです。なので役者のみなさんは、その人物がどんな人物か、他の人をどう思ってるか、演劇について、生きることについて、今の自分について、いろんなことについてどう感じて思ってるか、どんな状況におかれているか、仕事は安定しているか、恋愛はうまくいってるか、演劇は楽しいか、今日の本番はうまくいったのか、どんな体調か、昨日よく眠れたか、ご飯は食べたいのか、他人からどう見られたいのか、カッコイイと思われたのか、カワイイと思われたのか、真面目だと思われたのか、誠実だと思われたのか、何に関心があるのか、お笑いが好きなのか、チェーホフが好きなのか、自分の子供に興味があるのか、生のライブ感が好きなのか、何に興味がないのか、昔別れた男はどうでもいいのか、不倫なんて気にしないのか、なにが矛盾しているのか、他人の芝居がつまらないのは許せないのに自分の芝居がつまらないのは仕方ないのか、なにを諦めてきたのか、なにを諦めきれないのか。そういったことをどんどん決めていくことで、だんだんひとりの人間というものが出来上がっていくように思います。それを決めることで、自然と、生きた台詞が言えるようになるんだと信じます。2ヶ月弱とい

う短い期間ですが、頑張りましょう。

## あとがき

僕が代表する「劇団アトリエ」という札幌の劇団が結成してから3年が経って、いよいよ4年目に突入しました。3年間劇団をやって、札幌演劇界というところにおいて、いろいろと思ったこととか、感じたこととかがあつて、例えば、ありがとうございますって思うこととか、すみませんって思うこととか、ムカつくって思うこととか、そういうものが台本の節々に出るといいなと思いつつ書きました。

演劇っていうものを8年間くらいやってきて、それでもまだまだ演劇っていうものは正体不明なんですけれど、それでも以前よりは演劇のいろんなことがわかってきた気がしてきて、あと10年くらいしたら、「あ、演劇ってこういうものなんだな」ってというのがわかるかもしれないと思つてます。

アントン・チェーホフの『かもめ』という作品があつて、当初は、まあちよつとだけ借りてきてほんの一部分にしようかなと思つて書き始め、第一稿を書き上げたわけですが、

第二稿に書き直すときに、どうにかもつと面白くしなければならん……。と思ひチェーホフの『かもめ』をめぐっては、「これいただき」と思つてどんどんとつていって、気づけば随分とつてきてしまいました。

僕は2013年4月から世に言うフリーターというものになりました。そして今年の5月には24歳になります。30歳になるまでたった6年しかありません。時間なさすぎです。30歳までに素晴らしい演劇ができるようになっていんだらうか、不安でなりません。

今後とも、小佐部明広と劇団アトリエをよろしくお願いいたします。

2014年1月6日(月) 小佐部明広

## 《上演記録》

シアターZOO企画公演【Re:Z】

劇団アトリエ第12回公演 デイリー作品3 『ピーター・フック』

### 【キャスト】

小山佳祐(劇団アトリエ)

柴田知佳(劇団アトリエ)

伊達昌俊(劇団アトリエ)

有田哲(劇団アトリエ)

小佐部明広(劇団アトリエ)

細谷史奈(劇団千年王国/劇団宴夢)

信山E紘希(座・れら)

辻直弥(北海学園演劇研究会)

山下瑚波

玉井春花

佐竹遥

### 【スタッフ】

作・演出 小佐部明広

舞台プランナー 川崎舞

音響 柳田紗耶未(北海学園大学演劇研究会)

照明 山本雄飛(劇団しろちゃん)

衣装 阿部文香(北星学園大学演劇サークル)

小道具 小川沙織(劇団ELEMENTS)

宣伝美術 小佐部明広

フライヤー写真撮影 小林翔平

制作 加納絵里香 柳田紗耶未（北海学園大学演劇研究会）

【日程】

2014年2月28日（金） 20時

2014年3月1日（土） 14時／19時

2014年3月2日（日） 12時／17時

【場所】

扇谷記念スタジオシアターZOO

【料金】

一般前売 1600円（当日1800円）

25歳以下前売 1000円（当日1200円）

高校生以下前売 500円（当日600円）

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

2014年2月27日 第1刷制作

2017年10月4日 第2刷制作

《『ピーター・フック』の上演について》

「一般前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以

下」の場合は、脚本使用料は無料です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラーク芸術堂企画運営委員会まで。

【クラーク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com